



機構上に於ける今日の問題

奥井復太郎

國家・社會の機構に關する近來の傾向や、又は之れに關する言説に就いて二つの顯著な特徴が現はれてゐる様に思はれる。その一つは綜合化といふ事であり、も一つは中間組織の整備といふ事である。

前者は「國土計畫の綜合性」とか「綜合的企劃」とかいふ言葉に示される様に専門・特殊化に對して強調されてゐる。實際、専門化又は經濟學上で云ふ分業なるものはそれが組成せられなければ、つまり他の専門的部門との間に全體的編成が無ければ全く意味の無いものであるといふ事は判り切つた事でありながら、その反面、専門は専門として追及せられなければ無意味だといふ事も無理である。従つて茲に問題になるのは之れを組成する機構がどうかといふ點に存するの

である。茲に機構上の問題として綜合とか編成とかの問題が生じて來るわけである。從來は専門特殊化に走り過ぎて其の全體的編成に關しては聊か等閑に附した嫌がないでもなかつた。之れに對して近來、専門特殊化した一部門が適正なる座標を與へらる可き恰好なる枠を考へるといふ事が重大となつて來たのである。

若し特殊・綜合の問題が機構上の平面的問題とするならば中間組織整備の問題は立體的問題とも云ふ事が出來よう。此の整備の問題を吾々は「國土計畫と地方計畫及び都市・鄉村計畫」といふ様な表現の裡に發見する事が出来る。以下此の問題に就いて聊か詳しく論じてみよう。

二

過大都市論から見ても地方文化論又は工場分散論から見ても國土計畫は（必然的にとは云へない迄も）分散主義の體系として今日登場して來てゐる。事實、人口も資本も、従つて産業及び文化活動も、現在の様に國內の一、二の巨大都市に集中し切つてゐる場合、之れに何等かの國土計畫的改變を加へ様とするならば、其の集中的傾向をも一層強めるのである。人口の分散即ち富と資本の地方的分散を設計する以外に方法はない筈である。茲に分散的機構論の問題が提起せられるわけであるが、此の分散は決して單純な「散らばす」といふ事では無い。

元來、現代國家及び社會が中央に集權又は歸一的に統合せられねばならぬ事は云ふ迄もない。しかし此の中央集權又は歸一的統合の仕方にいくつかの型が機構上存在し得るのである。之れを今、三つの型、そして之れは同時に國家・社會の發展的過程に對應するものであるが、三つの型即ち過程的段階に分ける事が出来る。第一の型又は過程は嚴密に云へば中

中央化以前の狀態で其の意味では分散といふよりは分離といった方が正しいかも知れないが、之れを「素朴なる分散」と名づける。第二の型又は過程は、之れに反して、單純な中央集權とも云ふ可きもので中央化集權化は確立してゐる型であり段階である。たゞ之れに單純といふ修飾をつける所以のものは中央と地方との關係が極めて單純で地方から直ちに中央といふ具合に連結してゐるに過ぎないからである。此の段階又は型は次の、第三の型又は過程に對照すると最もよく其の特徵が分る。つまり第三の型又は過程は複合的中央化とも云ふ可きもので或ひは分散的中央化と云ふ事が出来る。若し第一の型が「正」であるならば第二の型は正しく「正」に對する「反」である。が第三の型は此の正・反に對して「合」とも云ふ可きであらう。

第二型の特徴は中心が唯一であつて全體の中心がたゞ一つあるきりで他に次位又は下位の中心も存在しない事である。反之、第三型は全體の中心は勿論一つであるが副次的な中心を比較的多數もつといふ點にその特色がある。のみならず、此の副次的な中心自體が更にその下位の副次的中心を持つのであつて、云はゞ中心が上下の序列に於いて整然と配備せられる體系になつてゐる。故に之れは第一型の中心の殆ど無い素朴なる分散とも違ふし單純なる中央化の單一中心型とも異なる。之れまさに正・反に對して合の立場にある事を示す。之れを少しく歴史的に説明してみよう。

三

素朴なる分散型に適合するものは封建制の社會である。之れには中央化の事實が頗る微であつて地方は各地方自體に於いて自立してゐる。かう云ふものとして各地方にはそれ／＼の獨立の中心があり、中央化が著大でない限り、又地方的豊

瘦に著しい差異が無い限り、同似的な地方編成が全国的に均分してゐると云つて差支ない。事實、江戸は徳川幕府の政治的中心には相違なかつたらうが、同時に或る時代にあつては其の性格が關八州の地方的中心であつて名古屋や、仙臺、金澤、鹿児島等と同似のものであつたと思はれる。規模に相違があつても、前述した幕政の中心と云ふ事を別にして考へてみると藩高に應じて大小の差を示したと云つて差支へない(明治はじめの我國都市人口は大體各藩の大小に應じてゐた)。

近代國家は此の體制を破壊して成立してゐる。近代國家はそれ自體が強化する時、當然中央集權を要求した。之れが明治政府である。何故、中央集權を要求したかと云へば、封建的分散勢力を弱化せしめ、號令が一途に出でるの實を擧げねば到底中央政府の權威を貫く事が出来ないからである。それ故、地方に於ける既存の文化なり中心力は、必要とあらば之れを打倒しても中央化の一途に進進せねばならぬのである。明治政府の地歩を堅める爲め、如何に東京があらゆる活動の中心化したか、改めて説明するまでも無からう。單に開國、西歐文化の渡來によるばかりで東京が繁昌の中心となつたのではない。政治は勿論學校も文化も從つて人材も知能も機關も凡べてが意識的無意識的に東京に集められ、或ひは東京に於いて興されたのである。

之れが單純的中央集權化の過程であつて、地方は全く單一の中心に隸屬し地方的中心は殆ど中心としての機能を喪失するに到つた。全國に於いて中心が唯一になつたといふのは此の状態を指すのである。

四

所が國家社會が完成し且つ成長して行くにつれて此の機構は其のまゝでよくと頗る危険となつて來た。中央集權の實が

上り、中央統制が強化するに従つて此の單純なる中心化は頗る機構上脆弱である事を暴露はじめた。

先づ第一に此の機構は中心と末端とがあつて中間の連結のない状態である。或ひは甚しい場合は中間連結にもあたる可き地方的中心が如上の過程に於いて壞廢されて了ひ、所謂地方文化の極度の衰退を惹起してゐる。中心がそれ程強大ならざる間は此の形に於いても不都合が無かつたが中心が強大になつて然かも中間の連結がなく直ちに末端に結びついてゐると、中心から末端への、末端から中心への流動、それは所謂上意下達、下情上通といふ事であるが、此の流動が動もすると其の動脈を阻塞したり破裂させたりして、いづれにもせよ、中央の欲する所が末梢の隅々まで穩便に平靜に傳はらぬ次第となるのである。

此の場合、之れを救ふ可き方法は中心と末梢との間に幾段階の中間連結の機構を設く可きであつてそれ以外此の傳達を圓滑ならしめる方法は無い。例へば人口七百萬を越える大東京を例にとつて見ると、東京驛を中心として半径約三十哩の遠方から通勤、通學、買物、娛樂等に何十萬といふ人間が集り且つ散じてゐる。勿論、交通體系の上からは中間連結はあり、其の連結點で乗換等が行はれるが通勤とか購買とかの上では是等の地點は毫もその交通流を其の地點に止める事が出来ない。更に之れを都心地へ（或ひはその逆の郊外地へ）運ぶだけである。之れが過大都市東京の混亂の原因なのである。

故に若し三十哩内外の地點にいくつかの副次的中心が出来て、それが附近の中心となり、東京の中心は其等副次的中心で間に合はぬものゝ中心、つまり中心の中心といふ形をとれば、前述の混雜と混亂とは一應、幾分なりとも緩和する事が出来る。否、此の方法によつてのみ緩和が可能なのである。之れを行はなければ如何に交通機關の數を増加し路線を敷設しようとも中心及びラツシュニアワアの混雜は之れを消す事は不可能である、

國家・社會の場合に於いても之れと同様である。中央だけが完備しても、それは頭大にして尾振はずの譬に漏れず、中央から地方に向けていくら連絡の線を増加しても機構上の改革が無ければどうにもならないのである。之れ必然に第三型としての複合的中央化の要請が生れる所以であり、これは事實、中央から末端までの間に中間連結の整備となつて現はれて來るのである。之れが冒頭に述べた。近來の國家・社會機構上の一特徴としての中間的組織の整備といふ問題なのである。

五

中間的組織整備の必要はあらゆる方面に現はれてゐる。末梢組織の必要としては既に町内會部落會つまり隣組々織に示され、或ひは産業報國會とか職場五人組といふ様な制度に示されてゐる。或ひは學校報國隊乃至は勤勞報國協力令による勤勞報國隊等の隊組織に實現してゐる。中間組織の整備としては郡制の復活が地方行政改革と共に論ぜられてゐると同時に最も重大なものとしては綜合府縣制、所謂地方計畫の行政地域ともなる可き道制に對する要求の如きいづれも這般の必要に應じた傾向に外ならぬ。何れも中央から末端に到るまでの間に上下の順序に應じてそれ〴〵適當な中間連結の組織を設けて所謂上下傳達の圓滑をはからうとする所に眼目を置いてゐるに間違はない。併し茲に注意を要する事は此の中間組織は單に中間にあるといふ事だけでは足りないものであつて、中間にあると共にその末梢に對しては中心的機能たるものでなければならぬ。

此の關係は圖型的に見ると頗る興味がある。若しこれを線分として圖型化するならば、都市交通流の圖型の様に郊外に於ける毛細管的なものから順次に太くなつて來て都心地の心臟部に大動脈となつて流入する、丁度樹の幹枝狀を呈する。

此の問題に就いては嘗て本誌で道路の體系を論じて之れと同様の結論を述べた事がある。

反之、此の關係を點を以つて圖型化するならば大中小、様々な圓を描いて大から中、中から小へと結びつける一種の放射型（垂直に見るならばピラミッド型）を描く事が出来る。之れを前の道路設計になぞへて云ふならば、此の方は廣場プラザの設計とでも云ふ可きである。いづれにもせよ、圖面上に中心が唯一つでないといふ事、同時に是等中心相互間には自ら一定の序列のあるといふ事、そしてそれを正しく連結して行くと中央から地方、中心から末梢への（或ひはその逆の）動きが最も圓滑平靜に傳達される一つの體系が完成するといふ構成になつてゐる。

六

我國の國土計畫には既に内地・滿・蒙・支に限られないで極めて迅速に南方地域が入つて來た。元來中心の機能はその及ぶ面積が擴大すればそれだけで非常に強化するものである。前の東京の例を以て云へば山の手線沿線内側に郊外のあつた明治時代の東京と、半徑が十哩から三十哩にも及んでゐる今日の東京とでは都心地の持つ機能に著しい強化が行はれてゐるのである。ましてや大東亞國土計畫は中心の管理する面積が擴大したといふだけでなく諸々の事業なり關心なりに於いて質的にも量的にも複雑になつて來てゐる。従つて指導國家としての日本の中心が負ふ所の機能はいやまして強化してゐると云はねばならぬ。さうとすれば前に述べた所によつてそれだけ充分に末梢組織の整備に併せて中間連結の整備をはかる事が急務である。

吾々は國土計畫を考へる場合、一應は之れを圖型的に見る。北、樺太、千島から西南に長く延びて昭南島に到るまでの

此の長廣な空間を前に描いて見て吾々は當然、中心配置（それは大・中・小各種各様の中心）を考へなければならぬ。現に日本内地に於いて東京と大阪の二中心（之れは全部の機能に於いて兩者が完全に二分したものでなくとも）を持つてゐた。之れが西南に又數千キロの空間を擴大したとなると、吾々は更に第三の中心を考へる必要が生じて来る。それが何處であるかは直ちに云へる事では無い。唯、原則的に述べてそれが絶海の孤島でもなければ人煙粗なる山嶺でもない。東京、大阪の場合に知られる通り、相當廣面積の充實したヒンタアランドを持つ地點でなければならぬ。そして同時に少くとも近い將來に於いて充分なる文化を含み得る土地でなければならぬ。勿論中心間の連絡上交通の要地たる事は云ふを俟たぬが是等の諸條件をそなへた土地が早急に選定される必要がある。

之れに次いで是等の大中心に屬する中小の副次的中心の配置を行ふ事が出来よう。そうかうした圖型を吾々は更に線でつないでみなければならぬ。之れが交通の問題であり、船舶の問題であり、廣くしては「路」の問題である。此の「路」にいづくの幅員を與ふべきや、その上を往復する交通量は如何に。かう考へて來ると未だ問題が澤山残されてゐる。たゞ是等の問題については各々専門家から聽く事が出来る。要は當初に述べた様に如何によく之れを綜合化して整備するかの問題である。之れ。現代國家社會の機構上の問題として最も當面的なるもの二點を捉へて雜論を試みる所以である。